



TITLE:

漢代邊境の關所：玉門關の所在をめぐって

AUTHOR(S):

富谷, 至

CITATION:

富谷, 至. 漢代邊境の關所：玉門關の所在をめぐって. 東洋史研究 1990, 48(4): 631-679

ISSUE DATE:

1990-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154307>

RIGHT:

東洋史研究

第四十八卷 第四號 平成二年三月發行

漢代邊境の關所

——玉門關の所在をめぐって——

富 谷 至

はじめに

I 居延漢簡にみえる關とその關連史料

(一) 肩水金關出土木簡

(二) エチナ川流域の關所

II 漢代玉門關の所在

(一) 敦煌馬圈灣漢代烽燧址

(二) 玉門都尉と玉門關都尉

結びにかえて

はじめに

631
西漢武帝期、匈奴との戦争に勝利をおさめ河西回廊一帯を領有した漢王朝は、長城を西に延長するとともに、そこに四つの郡を置く。漢代の敦煌郡は、河西四郡と呼ばれるこれらの郡の最西に位置するわけだが、敦煌がいつごろ郡となった

のか、正確な年代については説が一致していない。ただ貳師將軍李廣利による大宛遠征の前後、西暦前一〇〇年頃といちおう考えてよからう。

敦煌郡、張掖郡など邊郡の統治組織については言えば、郡太守の下に民政と軍事を統べる都尉(部都尉)が置かれ、その下に候官(その長は候)、候官の下に候(長は候長)、候の下に燧(長は燧長)という機關が存在していた。こういう機構は、近年になって邊境地帯から出土した簡牘の研究が進むにつれ、はっきりしてきたのであり、敦煌郡に關しては、王國維『流沙墜簡』及びそれをふまえた藤枝晃「長城のまもり」の二著が詳しい。それによれば、敦煌郡下には東から宜禾都尉、中部都尉、玉門都尉の三都尉府が置かれ、最西の玉門都尉下では、東から玉門候官と大煎都候官の二候官が、また中部都尉には步廣候官が所屬し、各候官は數箇の燧を統轄していたとの推定がなされている。⁽¹⁾王國維、藤枝晃兩氏の業績は、簡牘研究の搖籃期にあつて驚くべき水準を有しており、今日までその價值はいささかも減じていないといえるが、ただそれ以後、敦煌一帯で新しい簡牘が少なからずみつかつており、推定されている候燧組織も若干修正が可能となつた。新出の敦煌簡にあつて特に注目せねばならないのが、一九七九年出土の馬圈灣出土簡と一九八一年の酥油土出土簡であり、たとえば後者では、このような一簡が出土した。

七月丁未敦煌中部土吏福以私印行都尉事謂平望破胡吞胡萬歲候官寫移檄到

81・D 38・13

從來、平望・破胡などの名をもつ候燧は、候官の下に候であると考えられていた。ところが右の簡によれば、中部都尉府下に平望・破胡・吞胡・萬歲の四候官が所屬していたことが判明し、これまでの所見は修正されねばならないのである。⁽⁴⁾

なお、酥油土―甘肅省文物隊編號D 38遺址は、他ならぬ平望候官の治所に比定されている。

新出の敦煌簡とは別に、スタイン、夏鼐發見の簡についても、いっそう正確な釋文が出版された。林梅村・李均明編『疏勒河流域出土漢簡』⁽⁵⁾なのだが、こういった最近の成果をふまえて、敦煌郡下の候燧組織についての私案を次頁に示そう。⁽⁶⁾

表 1 疏勒河流域候燧表

宜禾都尉				中部都尉				玉門都尉			
美稷候官	昆崙候官	魚澤候官	宜禾候官	萬歲候官	吞胡候官	破胡候官	平望候官	(所屬不明)			
				萬歲候 東·西部候	東部候	當會候	平望候 朱爵候 西部候	玉門候官	玉門候官	大煎都候官	大煎都候官
								西塞候 長羅候 西部候 虎猛候		通望候 大煎都候 步昌候 萬世候	
			臨介燧	揚威燧·顯武燧·安田燧 高望燧·安漢燧·利漢燧	玄武燧·威胡燧·止寇燧 高都燧·破虜燧·捕虜燧	宗民燧·官燧·止姦燧	博望燧·青堆燧·廣漢燧 朱爵燧·殄故燧·遮奸燧 譙虜燧	大福候·千秋燧·推賢燧	宜秋燧·乖虜燧·顯明燧 廣新燧·虎猛燧·當谷燧 受降燧·勇敢燧·誅虜燧 富貴燧	富昌燧·夜胡燧·斥地燧 大煎都燧·服胡燧·美水燧 馱胡燧·步昌燧·廣武燧 獲虜燧·廣昌燧·廣武燧	

ところでここにいまひとつ重要な邊境の機關が存在する。シルクロードの關門として有名な玉門關である。この關の所在地としては、北緯四〇度二十分、東經九三度五五分にある小方盤城と呼ばれる遺址——スタイン編號T 14遺址が有力で、一九六四年より甘肅省人民委員會がそこに省文物保護單位とする標識を立てている。

先に私は玉門都尉と玉門候官の治所についての考察を行ない、玉門候官と玉門都尉は同一地點に設置されたのではなく、T 14遺址は確かに玉門都尉の治所であるも、玉門候官はその北のT 15 a遺址に置かれていたと指摘した。さらに進んで、T 14遺址が關所として機能していたことを示す證據はどこにあるのかと問い、小方盤城を玉門關址とする一般の説に強い疑念を投げかけたのである。⁽⁷⁾本稿は、邊境の關所の機能と性格を明らかにせんとするものであるが、その中から上の疑問に對する私なりの解答を出してみたい。なお、考察にあたっては、まず比較的數量の豊富なエチナ川流域出土の簡牘いわゆる居延漢簡を利用し、居延地方の邊關の實態とその機能を検討し、その結果をもつて敦煌簡を分析して玉門關についての私見を述べるという順序をとることにする。

I 居延漢簡にみえる關とその關連史料

居延漢簡の分析を通して漢の關所につき考察した論考としては、大庭脩「漢代の關所とパスポート」⁽⁸⁾をあげねばならない。氏はここで一九三〇年・三一年出土の居延簡（以下、居延舊簡と略稱）にみえる通行文書（契・符）を摘出して検討を加えており、完成度の高い内容を有したのだが、論文が出された一九五〇年代段階ではいまひとつ不明であった出土地が最近になって判明した⁽⁹⁾ことにより、そこに新しい知見を加えることが可能となった。本章では、西北科學考察團遺址番號A 32より出土した居延舊簡をとりあげ、分析してみようと思う。その地は、肩水金關と呼ばれた關所が置かれていたことがわかつている遺址だからである。⁽¹⁰⁾

(一) 肩水金關出土木簡

關出入記錄

A 32—肩水金關址出土の簡のうち、關所關係のものとしてまずとり挙げたいのは、左に掲げる諸簡である。

E 1 昭武萬歲里男子呂未央年卅四—

五月丙申入

用牛二

一五・二〇 圖一〇七

E 2 肩水左後候長樊褒詣府對功曹

二月戊午平旦入

一五・二五 圖一〇二

E 3 ☒王永年廿二

九月乙巳☒

一五・一六 圖一〇二

E 4 居延鬼薪徒大男王武

閏月壬戌出

三七・一 圖四二五

E 5 ☐史☐非子長七尺黑色

十月辛亥出 ☐

☐

三七・三 圖四二五

E 6 河南郡滎陽桃郵里公乘莊盱年廿八長七尺二寸黑色

四月癸卯☒

四三・一六、四三・一八 圖四一四

E 7 ☒月丁未入

十二月丁酉出

五一・四 圖一四四

E 8 ☒送省卒☐府

二月庚寅入 ☐

五一・一六 圖四二三

E 9 長安宜里閭常字中允 出

乘方相車駕桃華牡馬一匹十八歲驪牡馬一匹齒八齒

皆十一月戊辰出 已

六二・一三 圖一〇六

E 10 ☒當陽里唐并年十九長七尺三寸黃黑色

八月辛酉出☒

六二・三四 圖一一一

E 11 居延城倉佐王禹鞮汙里 年廿七・問禹曰之饒得視女病

十月乙酉入

六二・五五 圖一一一


E 12 戍卒梁國睢陽新☐里公乘孫☐年廿六

九月丙寅出
癸巳入

一四〇・三 圖四一六

右にあげた十二の簡にみえる共通した特徴は、上から出身地（所屬機關）・名前・年令・某月某日出入といった内容が記載され（簡によっては目的、攜行物が記入）、しかも名前と日付の間は一定の間隔が空けられていることである。同類の簡とし

では、この十二例以外に断片ながら(三七・四)(三七・三〇)(四三・九)(五〇・一九)(五一・一三)(五一・一六)(六二・二一)(七七・六八)(二二・二五)(二二・六二)(三四〇・二一)(三四〇・二二)(三四〇・五四)などをあげることができ、A32遺址から居延舊簡で計二五點出土している。⁽¹¹⁾これらは、某月某日にこの地つまり肩水金關を通過した者のリスト、關出入記録とも言うべきものであろう。⁽¹²⁾

そこでいま考えてみたいのは、こういった出入記録は、出入した場所で書き下ろされたもの(これを「一次記録」と假稱)なのか、それとも一次記録をもとにして整理し書き直されたもの、もしくは原簿の副本(これらを「二次記録」と假稱)なのかということである。その手がかりを與えるのが、E7、E9、E12の三簡であろう。E9簡には「出」「皆十一月戊辰出」がともに小さく右に寄せて書かれている。これは後日左に「入」に關する記録を記入することを前提にしたものに違いなく、「入」の記録が追書された形がE12の簡に他ならない。一方E7簡について、殘念ながらここに寫眞を掲げることができないが、『居延漢簡』圖版之部一四四頁にみえるこの簡、「月丁未入」と下の「十二月丁酉出」の兩者の墨色を比べてみれば明らかに差があり、後者は前者よりも格段に墨の色が濃い。ということは「十二月丁酉出」は後になって追書されたことを物語っているのではないだろうか。關出入記録は出土地、つまり肩水金關で作られた原簿——一次記録であるといつてよいであろう。そしてさらに一步進んで、一つの簡に「出」と「入」を記録するのに時間の差があるかある一次記録は、實際の出入場所——關所でしか存在せず、逆にこういった出入記録が出土するところは關所址である可能性が極めて高いと考えられるのである。

傳(榮・過所)

次にあげたいのは、傳(榮・過所ともいうが、本稿では、傳に統一する)である。

E13 永始五年閏月己巳朔丙子北鄉番夫忠敢言之義成里崔自當自言爲家私市居延謹案自當母官

獄徵事當得傳謁移肩水金關居延縣索關敢言之

閏月丙子饒得丞彭移肩水金關居延縣索關書到如律令／掾晏令史建

一五・一九 圖一〇一

永始五年閏月八日、北鄉畜夫忠が申し上げます。義成里の崔自當が、家の爲めに私的に居延で商いをしたいと自ら申告してきました。調べてみるに自當には前科はなく、傳を取得できます。肩水金關、居延縣索關に送付します。敬具。閏月八日饒得丞彭、肩水金關、居延縣索關に送付。この書簡が到着したなら、律令の規定どおりにとり行なえ。

／掾晏、令史建

E 14 甘露三年六月癸丑朔庚辰佐赦之敢言之遺令史安世移簿

□一編縣道河津金關毋苛留止如律令敢言

(正)

四三・二二A 圖一三九

□□□候長印

(背)

四三・二二B 圖一四〇

旅行者の身分證明書である傳について、これも大庭脩氏が詳細に考證している。⁽¹³⁾氏は居延舊簡の中に存在する傳の斷簡を全て拾いあげ、書式、公用・私用の別、發給地などの面から分析を加えており、ここで新たに附け加える點はあまりない。ただ一點、先の出入記録において言及した、一次記録か二次記録かという視點から若干検討を加えておこう。

居延舊簡のなかで傳の斷片と考えられるのは、五十本弱であるが、それらは關所址に限って出土しているわけではない。肩水金關と關係する官署でいえば、肩水候官(A 33遺址)、肩水都尉府(A 35遺址)からも同じような内容を記した傳がやはり見つかったのである。一例ずつあげよう。

E 15 元康二年正月辛未朔癸酉都鄉嗇夫

當以令取傳謁移過所縣道河

正月癸酉居延令勝之丞延年

(正)

A 33出土

二二三・二八A、二二三・四四A 圖三六

印曰居令延印

(背)

二二二・二八B、二二三・四四B 圖三七

E 16 建平五年十二月辛卯朔庚寅東鄉嗇夫護敢言之嘉平

□□□□案忠等母官獄徵事謁移過所縣邑門亭河津關母苛留敢言之

十二月辛卯祿福獄丞博行丞事移過所如律令／據海守令史衆（正）A 35出土 四九五・二二A、五〇六・二〇A 圖二三
祿福獄丞印 （背） 四九五・二二B、五〇六・二〇B 圖二四

傳の文面、特にその宛先はE 14「縣道河津金關」、E 15「過所縣道河□」、E 16「過所縣邑門亭河津關」となっており、關所に限っていないことからみて、傳の斷簡が關以外の候官、都尉府の遺址からも出土することは、納得できよう。加えてやや時代はさかのぼるが、雲夢秦簡〈法律答問〉に注目すべき簡がみえる。

發偽書弗智貲二甲^レ今咸陽發偽傳弗智卽復封傳它^レ縣^レ亦傳其縣次到關而得^レ今當獨咸陽坐貲且它 四二七

縣當盡貲^レ咸陽及它縣發弗智者當皆貲 四二八

偽書を開封して氣づかなければ貲二甲。いま咸陽で偽傳を開封して氣づかず、又封をして他縣に傳送し、他縣でも同じように次の縣に傳送し、關所に至って發覺した。ひとり咸陽のみが貲罪に當たるのか。それとも他の縣もなべて罪に當るのか。咸陽および氣づかず開封した他縣は全て貲罪に當る。

關所に限らず通過する各行政軍事單位（過所縣邑門亭河津關）で傳が確認されること、秦簡は語っているのである。

そこで問題となるのは、關・候官・都尉で出土の傳は、旅行者が持参していたものなのか、それともその控えなのかという点、本稿で使った用語でいえば、一次記録・二次記録のどちらかということである。この問題には大庭氏も強い關心を示しており、氏も言うように解明の有効な方法は、傳の筆蹟を調べることにはちがいない。しかし現段階で同筆の傳を確定することは難しく、加えて事柄は私の能力を越える。せいぜい次の方向から考えることで一往の判斷を下しておきたい。(一)關もしくは候官、都尉で持参の傳を回収しても、新たな傳を再發行せねば旅行者は身分證明書がなくなり、最終的には出發地にもどれなくなる。旅行者であるかぎり、身分證明書は常に攜帶していると想定せねばならない。(二)すでに永田英正氏が言っているが、E 14、E 15、E 16の背面に記入された「某々之印」とは、封印された印影の寫しであり、そこ

から正面の文も寫しの可能性が強い。(三)雲夢秦簡の簡文を読むかぎり、咸陽から關所まで同じ偽造の傳が送付されたといわれる。(四)時代が少し下るが、晉令に次のような一條がある。「晉令。諸ろの關を渡る及び船筏に乗りて上下し津を経る者、皆な(過)所有り。一通を寫して關吏に付す。」(『太平御覽』卷五九八)

以上の四點より、私は居延漢簡にみえる傳を、旅行者が持参したものの寫し、つまり二次記録だと判断したい。

符

一對の簡を分けて所持し、二枚を照合することで信用の證とする符のうち、通行に關する符は居延舊簡において十枚、確認されている。

E 17 始元七年閏月甲辰居延與金關爲出入六寸符券齒百從第一至千左居

官右移金關符合以從事・第八

六五・七 圖一

E 18 始元七年閏月甲辰居延與金關爲出入六寸符券齒百從第一至千左居

□□□□□□符合以從事・第十八

六五・九 圖一

E 19 始元七年閏月甲辰居延與金關爲出入六寸符券齒百從第一至千

六五・一〇 圖一

E 20 金關出入六寸符

符從事

一一・八 圖六九

E 21 出入六寸符券齒百從一至

符

一一・二六 圖三九

E 22 寸符券齒百從第一至千左居

二二・一七 圖九三

E 23 居延與金關爲出入六寸符券齒百從第一至千左居

符合以從事・第七

二七四・一〇

腑におちない。

そこでまず考えたいのは、符文にいう「左居官」の「官」を居延縣ととるのが正しいのかということである。居延漢簡にみえる「官」とは候官のことを指す場合が多いが、ここに於いても例外ではなく、候官つまり肩水候官のことだと解するほうが自然でなからうか。むしろそう解釋してはじめて何故かかる簡が肩水候官址から出土するのか説明がつく。すなわちE17～E24は肩水候官に置かれた「左半分」だと考えられるのである。私は一連の符文の内容をこう理解したい。

「肩水都尉府もしくは肩水候官所屬の者が金關を通過して居延地方に向き、また肩水候官にもどってくる。その場合持参せねばならない符は肩水候官に常置しており、それを攜行して往復の金關通過の際、そこに置いてある他の一片と照合し出入が認められる」と。符は居延縣と金關の間で交されるものではなく、肩水候官（もしくは肩水都尉府）管区内の屬官が金關を出入する際に使用するものである。⁽¹⁹⁾かかる符はおそらく吏卒の巡視などに使われ、定期性の強い公務を帯びた者が利用し、しかも大庭氏も言うごとく短距離を移動する者が一定の關に限って使用したのである。なお肩水金關にも置かれたはずの符について言えば、居延舊簡の中からは見つからなかったが、一九七三年出土の居延新簡のうちにA32出土と考えられるものがあること申しそえておく。⁽²¹⁾

しかしそれでも不明なことが少なからず残る。何よりもわからないのは、傳と符との關係である。公用・私用、距離・遠距離に限らず旅行者は、傳と符の二つを攜行したのであろうか、それともどちらか一種でよかったのか。定期的巡視者使用と想定できるE17～E24に限ってみれば、傳は不用だったろうが、E25、E26の符は、少しく性格がちがう。臺佗候官延壽燧長孫時、同吞胡燧長張彭祖が家屬と共に金關を通過した際のこの符についていえば、彼らが別に身分證明書である傳を所持していた可能性は否定できない。旅行者は、旅行が終了するまで所持せねばならない傳―身分證明書（それは、所屬縣、所屬官署が發行⁽²²⁾）と各關所を通過する際、照合する符（關所毎に獨自にあって、傳所持者に關ないしその上部機關が發行）の兩者を保持し、符は通行チェックをより厳正にするとともに通關手續の簡便さをはかるものといちおう考えてみ

たいが、それを明確に裏づける證據は、いまのところない。⁽²³⁾

致籍

關所にかんする簡のなかに「致籍」という語が書かれているものが散見する。肩水金關出土簡には、たとえば、

E 27 ☒凡出入關傳致籍

五〇・二六 圖二九

といった掲があり、スタイン發見敦煌簡の中にも「致籍」と記した簡がみえる。

E 28 ☒玉門都尉府屬吏

(正)

☒致籍

(背)

疏三五二

E 29 ☐適士吏張博

閏月丁未持致籍詣尹府

疏三六四

掲の表題ともなっているこの「致籍」とは、何を意味するものか、これについてはすでに陳邦懷、裘錫圭、薛英群の各氏が言及しており、私はその中で致の登記簿の一種とする裘氏の説に大筋において賛同する。氏の所論と重複するところがあるが、その理由を述べておこう。

まず、「致」という語につき、關所に關連した簡では次の様な用例があがる。

E 30 ☒私市居延願以令取致謹 ☒

二四三・三四 圖一二二

これは、すでにとりあげた身分證明書―傳の斷片だが、そこに見える「以令取致―令を以て致を取る」は、例えば他の簡では「願以令取傳謹 ☒」(二四三・三七 圖一二二)、「當以令取傳」(E 15 既出)と表記されている。用例としては「致」よりも「傳」と記される方が多いのだが、「致」と「傳」がここでは同じ意味に使われていることは注目してよい。他に次のような傳もある。

E 31 甘露四年六月丁丑朔甲辰西鄉有秩 ☐ ☐ ☐ ☐

王武案母官徵事當爲傳致 ☐ ☒

□□□六月雜陽

三三四・二〇A 圖五八

「當爲傳致□」の下は簡が折れているが、既出のE 13「謹案自當母官獄徵事當得傳謁移……」などからすれば「傳致謁(移)……」と續き、「傳致」という連文であって、それは「傳」と同じ意味と考えられる。E 27の楊「出入關傳致籍」も「傳致籍」で一語なのであろう。要するに「傳」「致」「傳致」はともに通行證のことなのである。「致」が果たしてかかる意味ならば、「致籍」又は「傳致籍」と呼ばれるものは、通行證(傳)をもって關所を通過した者のリストと考えるのが妥當であろう。金關からは、次のような楊も出土している。

E 32 陽朔元年六月吏民出入籍

二九・三A、B 圖六〇

「出入籍」「出入傳致籍」ともに同じ意味に相違ない。

致籍が通關者の名籍であり、しかもその語は表題として楊などの上に記されているということは、おそらく關所において日毎の通行者がある一定期間毎にまとめて整理していたことを物語る。すなわち一次記録―關所出入記録が整理されたのが二次記録―致籍ということになろう。ところでこの様に初めの名簿を整理するということは、言うまでもなくそれを上級官署に報告せねばならないからに他ならず、たとえば陳邦懷氏らは致籍の意味を上級官廳に提出する文書と解している。見てきたように致籍の語義をそうとすることはできないが、致籍作成の目的が上級官廳への報告にあったことは否めない。ではそれはどこに向けて報告されるのか、上級官廳とは具體的には何か。事柄はここで關所の統屬關係ということに及んでこよう。目をより廣くエチナ川一帯に向けることで、この問題を考えていきたい。

(二) エチナ川流域の關所

エチナ川流域の漢代烽燧遺址のなかで、そこが關所址であると確實にわかっているのは、A 32肩水金關址だけだが、他に關所の遺址はないのであろうか。それを探るひとつの方法は、A 32出土簡と似た特徴をもつ簡を出土する烽燧遺址を見

つけることである。

北緯四一度三〇分、東經一〇〇度四五分あたり、伊肯川の東岸に布肯^{ブヘントレイ}托尼 Bukten-torei と呼ばれる地がある。その東北の高臺に漢代の烽燧がわずかに残っており、西北科學考察團は A21 という遺址番號を附けている。一九三〇・三一年の調査では、二五〇餘枚の漢簡がそこから出土しているが、實はこの A21 も關所だったのではないかと推定される。出土簡のなかに次のような簡が見えるのである。

E 33 士吏饒得高平里公乘范吉年卅七 迎司御錢居延 一七〇・七 圖一〇九

E 34 徐黨年廿七 軺車一乘 八月庚子出 用馬一匹 九月甲戌入 二五・二 圖一三九

これは、記述内容および書式のうゑで前章でとりあげた關出入記録に相違ない。⁽²⁵⁾ 書式からいえばもう一枚、これは斷片だが次の E35 も附け加えてよいかも知れない。

E 35 里公乘解宗年五十三 二五・一三 圖一三九

こういった關出入記録は、關所址特有の出土簡であるが、他に關所址からは通行證―傳の寫しも出土する。A21 出土簡のなかにやはり傳が含まれているのである。

E 36 元延二年八月庚寅朔甲午都鄉嗇夫武敢言

褒葆俱送證女子趙佳張掖郡中謹案戸

留如律令敢言之・八月丁酉居延丞忠 一八一・二 A 圖六二

居延丞印

八月庚子以來 (背) 一八一・二 B 圖六三

E 37 朔 都鄉嗇夫長敢言

取傳歸敦煌 敢言 一八一・一〇 圖六二

E 38

元延二年七月乙酉居延令尙丞忠移過所縣道河津關遣亭長王豐以詔書買騎馬酒泉
敦煌張掖郡中當舍傳舍從者如律令／守令史詡佐癸七月丁亥出（正）

一七〇・三A 圖一〇九

居延令印

七月丁亥出

（背）

一七〇・三B 圖一一〇

傳、より正確には傳の寫し、が出土するのは、關所に限らず候官や都尉府の場合もある。しかしA 21遺址について言え
ば、ここは居延都尉府井候官の管區に屬し、井候官の所在地はA 21より北のP 9（博羅松治^{ボロフツチ} Borotouch）、居延都尉に
ついては、はっきり確定できないものの、カラホトあたりと推定されている。⁽²⁶⁾つまりA 21をもって候官・都尉の治所で
あったとは考えることはできない。とすれば、それ以外に傳が出土する遺址である關所の可能性が強くなる。關出入記録
と傳、この二種の關所特有の簡が出土することより、A 21は關所であったと考えておそらく誤りなからう。⁽²⁷⁾
A 32の他にA 21も關所の遺址であることがここに明らかになった。そこでこの二箇所出土の簡を改めて比較検討してみ
よう。とりあげたいのはE 11とE 33の二つの關出入記録である。

E 11 居延城倉佐王禹鞞汗里

年廿七・問禹曰之饒得視女病

十月乙酉入

六二・五五

E 33 士吏饒得高平里公乘范吉年卅七

迎司御錢居延

八月戊戌入
□□甲辰出

一七〇・七

E 11は居延城にいる王禹が娘の病氣見舞に饒得縣に向かう時、A 32肩水金關を通過した記録、E 33は饒得縣出身の范吉な
る者が司御錢を居延に受け取りに行く際にA 21を通過した時の記録である。問題はそこに記された「出」と「入」の語で
あり、E 11の場合、北から南に向かって關を通ることを「入」といい、E 33では南から北に向かうのを「入」と表現して
いる。すなわちA 32とA 21では「出」と「入」の方向が逆になっているのである。二つの關でかく出入の意味するところ
が反対であるのは何故なのか。畢竟それは、關所がどういった配置でどういう役割を果たすものとして設置されたのかに
起因するのであろうが、そのことを考えるにあたり、ここに素朴なひとつの疑問がわいてくる。エチナ川流域にはいった

い關所がいくつ設置されていたのであろうかという。

居延漢簡のなかに記されている關名は、これまで五つあがっている。うち二つは、すでに通行證―傳の簡、たとえばE 13などで確認できる肩水金關、居延縣索關であり、他に居延收關、殄北始廣關、卅井縣索關と釋讀できる簡が一簡ずつ存在するとされているのである。⁽²⁹⁾ E 39とE 41がそれに當たる。

E 39 吞遠候史李赦之

三月辛亥迹盡丁丑積廿七日從萬年縣北界南盡次吞遠南界毋人馬蘭越塞天田出入迹
三月戊寅送府君至卅井縣索關因送御史李卿居延盡庚辰積三日不迹

二〇六・二 圖二三五

E 40 必行加慎毋忽督蓬掾從殄北始廣關

到縣索關
如慎毋方循行
律令

四二一・八 圖一〇六

E 41 詣張掖太守府

正月戊午食時當曲卒湯受居延收關卒饒下舖
臨木卒護付誠教北縣卒則當曲
時中程
教北

五六・三七 圖三六八

このなかでE 39にみえる「卅井縣索關」は、圖版をみてもはっきりそう讀めるが、他のE 40、E 41の關名は、釋讀のうえで疑問が残る。E 40で「殄北始廣關」と釋讀したのは唯一、勞幹『居延漢簡考釋 釋文之部』(一九四九年刊)のみであり、その後なされたいくつかの釋文は「始廣關」で一定しているわけではなく、⁽³⁰⁾ 最近の『居延漢簡釋文合校』では「始度以」と釋す。事實、寫眞をみても「廣關」とは讀み難く、意味からしても「督蓬掾は殄北(候官)より始めて度って以て……縣索關に到る」ととる方が通ずる。一方、E 41について言えば、この簡は郵書傳達記録であるが、他に當曲燧との間で交された同類のものが少なからずあり、たとえば

E 42 八月庚戌夜少半臨木卒午受卅井

禺中五分當曲卒同付居延收降卒

二七〇・二 圖三三九

などからして、「收關」よりも「收降」と釋し收降燧という燧名にちがいない。⁽³¹⁾ 要するに居延舊簡中、確かに關名として釋讀できるものは、肩水金關、居延縣索關、卅井縣索關の三つしかないのである。

結論を言えば、私はエチナ川流域の關所の數は、金關と縣索關の二つであったと思う。そう考える第一の理由は、例の通行證の簡文である。それは傳發行の機關から通過すべき縣・亭・津・關に向けて通行者の通過許可を依頼する文書の形

式をとっている。その場合、E 16のように「謁移過所縣邑門亭河津關」と記すのもあれば、具體的關名をあげる場合もあるが、ただそこに見える名は、肩水金關と居延縣索關以外の關名は記されていない。E 13を例にしていますし考えてみよう。このE 13の傳は、樂得縣から居延縣に行く崔自當という人物の通行證である。「謁移肩水金關居延縣索關」として挙げられる關名は、やはり金關と縣索關のみである。とすると樂得縣から居延縣——その縣城はK 710あたりと推定しておく——に至るルート、つまりエチナ川流域には、二つの關しか設置されていなかったとみるのが普通でなかろうか。第二の理由は、關所の設置基準、關は、どういう行政又は軍事單位に所屬するものとして置かれたのかということである。肩水金關について言えば、E 17とE 24の符は肩水金關と肩水候官の密接な關係を示しており、別に肩水關番夫が肩水候の職務を代行することを記した簡もある⁽³²⁾。ならばそこから、各候官に關所が一つずつ置かれていたのかという假定も成り立つであろう。しかしかりに各候官毎に關所があったとすれば、何故E 13には他の候官に屬する關名が記されていないのか。肩水候官の北には薁佗候官が、西には廣地候官が置かれていたにもかかわらず⁽³³⁾、それらの候官名を冠する關名は見えない。ことがらは、居延都尉府の下⁽³⁴⁾の候官、殄北・甲渠候官についても同様である。確かに西北科學考察團の調査は科學的考古發掘として不十分なものであったが、私はやはり關名のかかる限定を單に偶然として片づけるのに抵抗がある。各候官毎に關が置かれたのではないとすれば、次に考えられるのは、都尉府の管轄をうけ都尉府毎に一つ設置されたのではないかということである。しかも肩水金關、居延縣索關という關名が冠する「肩水」「居延」は何かと問えば、それは肩水都尉、居延都尉を措いて他には考えられない。エチナ川流域には居延と肩水の二都尉府があった。従つて關所の數も二つということになるのである。

以上の理由を以て、エチナ川流域の關所は金關と縣索關の二關と推定するわけだが、先に居延舊簡中に確認できる關名は肩水金關、居延縣索關、卅井縣索關の三つだと述べた。この齟齬をおそらく指摘されるであらう。實は私はさらに一步踏み込み、次の臆測を加えてみたいのである。

關所の遺址に關して、A 32（肩水金關址）の他に A 21 も關所址だと論じたが、この A 21 は何という關名であったのだろう。そこで想起したいのが「卅井縣索關」なる關名である。A 21 は卅井候官管區内に位置し、そこから A 21 卅井縣索關といちおう比定できよう。ところが、卅井候官は居延都尉府に屬するわけであり、いま關所は都尉府毎に一つ置かれたとの推定に誤りがなければ、この關 A 21 は他ならぬ居延縣索關だとせねばならない。つまりところ A 21 の名稱は何か、私は A 21 の正稱は、それが屬する都尉府の名を冠した居延縣索關であると考ええる。ただ關所はその場所を管轄區域とする候官とも密接な關係を有し、A 21 が卅井候官區に位置していることから別名、卅井縣索關とも呼ばれた。まさしく臆測の域を出ないがこのように推定したのである。

エチナ川流域の關所の數とその所屬を右のように理解するならば、先にしばしば保留しておいた二つの事柄もおのずと明らかになる。一つは、A 32・A 21 兩遺址出土の關出入記錄に記された「出」「入」の意味、それは各關所が屬する都尉府に向かう場合が「入」、その逆が「出」と理解できる。居延縣索關（A 21）以北に居延都尉府が位置していることから、A 21 出土の簡では北行を「入」という。一方、肩水都尉府は肩水金關の南にあり、従つて南行を「入」とする。言いかえれば、出入記錄とは都尉府の管區に出入する者のチェック簿に他ならない。いまひとつは、關出入記錄を整理して作成された致籍、それはどこに向けて報告されるのかということであった。關所が出入者を報告する上部機關となれば、やはりこれも關所を統轄する都尉府と考えるのが適當であらう。すでにあげた E 29 簡、「□適士吏張博閭月丁未持致籍詣尹府」（疏三六四）の「尹府」を私は都尉府と解釋したい。また肩水金關の上部機關、肩水都尉府が置かれていたと想定される大灣 Taralingin durbeljin—A 35 からは關出入に關連した文書とおぼしきものも出土しているのである。⁽³⁴⁾

以上、エチナ川流域の關所の數と配置につき検討を加えてきたが、ここで邊境の關の設置目的、機能ということにつき考えてみよう。まず言わねばならないのは、エチナ川流域の二つの關の設置場所は、都尉府の境界ではなく、ましてや國境の最前線でもないということである。國境に置かれていないことは、圖 1 を見れば一目瞭然だが、都尉府の境界という

ことに關して言えば、肩水金關の北には肩水都尉府に屬する婁佗候官が位置しており、金關は肩水都尉府の眞中にあるといつてよい。A 21—居延縣索關は、一見居延都尉府と肩水都尉府の境にあると思えるが、A 21の南、A 22の遺址は卅井降虜燧という名の烽燧であり、⁽³⁵⁾居延都尉府下の卅井候官の管區にあたる。さらに郵書傳達記録のなかに、「卅井南界燧」という燧名が見えるが、⁽³⁶⁾これが個有の燧名とすればその地はA 22よりさらに南とせねばならぬ。各關所がこのように境界に設置されていないということは、關所がその性格と考えられがちな軍事防備といった目的を必ずしも擔っているわけではないことを示唆するのではなからうか。エチナ川流域の關所の機能を改めて考えてみなければならないわけである。

いまいちど漢簡が語る金關、縣索關の職務をふり返ってみよう。關所ではまず通行者について出身・年令・攜帶物・出入月日などを記録し、通行者が持参している傳の寫しをとり、又符を照合する。さらに通行記録をとりまとめ整理して上部機關に報告する。つまりそこから浮び上がってくる關所の職務は、通行者の厳格なチェック、その正確な把握であり、それは匈奴に向けての防備というよりもむしろ漢人吏民に對する管理と言つてよい。エチナ川流域の關は、各都尉府内を移動する漢人に對するチェックポイントであり、多分に内政的性格を有するものであった。

國內の吏民を監視することは、實は關所だけでなく、邊境の烽燧も負っていた役割であつた。『漢書』匈奴傳の次の一節、そこには外敵防備以外の機能を語つて餘りある。

元帝竟寧元年（前三三）、王昭君が匈奴單于に嫁す。喜んだ呼韓邪單于是、上谷から敦煌に及ぶ一帯の安全を保證するとともに、漢がその烽燧を徹廢してはどうかと元帝に提言する。それに對して郎中侯應は反對意見を十箇條にわたり述べる。前半はむしろ匈奴防衛についての必要性を説くのだが、後半には次のような理由を列擧する。

——理由の六。これまで從軍して捕虜となり歸還していない者が數多くおります。子孫たちは貧困のあまり逃亡すれば、彼らをたよつて行くことになるでしょう。理由の七。邊人の奴婢たちは愁苦して逃亡を計る者が多くいます。

「聞けば匈奴は天國。でも監視がこうも厳しくては」といいつつ。それでも塞外に逃亡する者があつたとを絶たないので

す。理由の八。盜賊、惡人どもが集團で違法行爲をなし、それらが窮するあまり北に逃亡すると、手がつけられなくなりす。……

以上、本章では居延漢簡を利用して、關所の機能を考察してきた。それらをここでもまとめておき、次章に移ることにしよう。

I 居延地方では各都尉府毎に關所が一つ置かれた。肩水都尉府の關は、肩水金關で A 32 遺址、居延都尉府の關は、居延縣索關（別名、卅井縣索關とも呼ばれた）で A 21 遺址がそれにあたる。

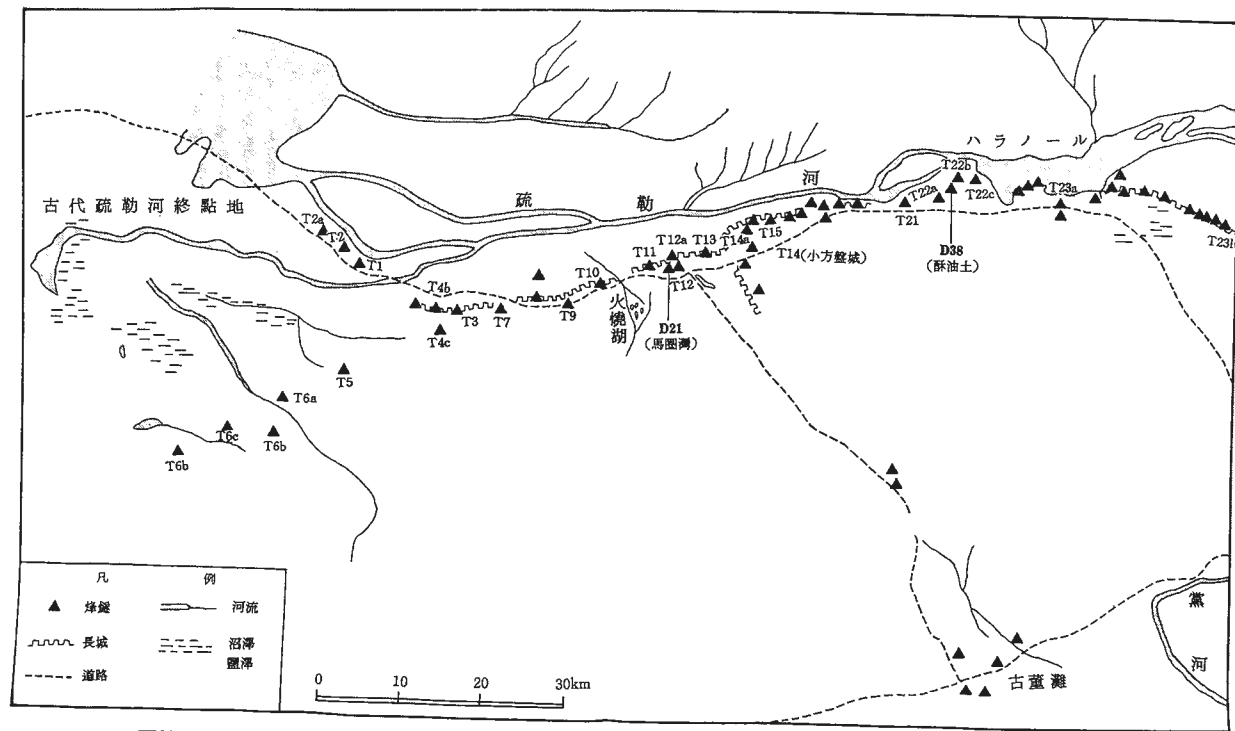
II 各關所がおこなう職務は、①通行者が持參する傳を檢閲し、その寫しをとる。②通行者の通行記録（關出入籍）を作成・整理し都尉府に送付する。③符の一片を常置し、通行者が所持する別の一片と照合する。などのことである。

III 關所は都尉府の管轄に屬し、關係文書は都尉府に送られる。一般に邊境地帯では文書は候官で收集整理されるが、關所は候官單位に置かれておらず、文書は都尉府宛となる。ただし、關所はその設置場所を管區としている候官の指揮監督もうける。

IV 邊境の關所は、ともすれば異民族に對する防衛という對外的役割をもつと考えられがちだが、實際は國內の吏民の移動を監視し、逐一記録するといった内政的性格が強い。少くともエチナ川流域のふたつの關は、かかる機能を果たしており、漢代の文書行政、それによる最末端までの人民管理の一環をになっているといえよう。

II 漢代玉門關の所在

漢代玉門關がどこに置かれていたのか、この問題が脚光を浴び始めたのは、やはり A・スタインによる疏勒河流域漢代烽燧址の調査に端を發する。以後、シャパンヌ・王國維・勞幹・向達・夏鼐・日比野丈夫諸氏がこれに論及し、様々な説



圖II 疏勒河流域烽燧圖(『疏勒河流域出土漢簡』卷末の「疏勒流域漢代遺址分布圖」をもとに作成)

が提出された。⁽³⁷⁾ 各氏の説をここで逐一紹介する餘裕はないが、今日まで考察の対象となってきたのは、「玉門」「玉門關」「玉門候官」「玉門都尉」「玉門關都尉」「玉門關候」などの名稱であり、それらを如何に解釋し、官署の所在地はどこかということであった。ただ、解釋の相異を示す諸説において奇妙な一致をみたのは玉門關の所在地であり、スタイン編號T14遺址（小方盤城）が玉門關址と諸家はなべて推定する。

T14遺址を玉門關址とする根據は、ひとつにはそこからスタインおよび夏鼐兩氏が「玉門都尉護衆」なる名が記された簡牘を一枚ずつ發見していること、いまひとつは唐代の地理書たとえば敦煌石室發見の『沙州圖經』、『壽昌縣地鏡』が記す漢代玉門關の位置が小方盤城にほぼ相當することによる。⁽³⁸⁾ このうち後者について言えば、地理書が記す里程が果たしてどこまで細かい數字をあげたものか、概數を舉げた里程内に存在する遺址は、T14に限らず、そこが玉門關址でなければならぬ必然性はない。一方、前者についても「玉門都尉護衆」の簡に代表されるT14遺址出土木簡を検討すれば、確かにそこが玉門都尉の治所であると推定できても、關所がそこにあったという證據は見出せない。⁽⁴⁰⁾ 小方盤城を玉門關址とみる説は、つまりはなほだ根據の薄いものでしかなかったのである。

こういったなかで、實は例外として陳夢家氏のみは異なる意見を提唱していた。氏は「玉門關與玉門縣」なる論考において、「玉門都尉」「玉門關候」などの語を分析し、T14を玉門都尉の治所と推定する。しかしそこは玉門關が置かれた所ではなく、關所はその西つまりスタイン遺址T11とT12の間、もしくはT13とT14aの間というのである。⁽⁴¹⁾ 陳氏の所論のなかには、いくつかの點で同意できないところもあるが、玉門關の位置については無視するわけにはいかない。何故なら、氏の説が出た十年餘ののち、まさにT11とT12aの間から、その慧眼を證明するかのごとき注目すべき新たな漢代烽燧址が發見されたのである。一九七九年發見の敦煌馬圈灣遺址に他ならない。

(一) 敦煌馬圈灣漢代烽燧址

一九七九年、甘肅省博物館と敦煌文化館が共同して行なった敦煌一帯の漢代烽燧遺址の調査において、新たな遺址が見つかった。敦煌縣西北九五キロ、小方盤城の西十一キロの地點、スタイン遺址T11とT12aの間に位置して通稱馬圈灣遺址と呼ばれるこの烽燧址は、スタインの調査では見逃されていたもので、甘肅省博物館はD21という編號をつけている。⁽⁴²⁾ 烽燧とその東の堡壘は、すでに壞れて砂でおおわれて圓い砂山のようになっており、そこから一二七枚にのぼる木簡（一部竹簡）が出土したのである。その數はそれまでに見つかった敦煌漢簡の總數を上まわるものだが、ただ残念なことに今日發表されている馬圈灣出土簡はわずか三〇餘枚にすぎない。

出土總數に比べて發表された簡はあまりに少なすぎ、いまこれらを使って全體を論ずるのは、冒險にすぎること充分に承知している。ただ、馬圈灣出土簡の全容がいつ公開されるのか定かでない現段階において、公表されているものからでも臆測にしろ考えてみても無駄ではなからう。しかもそこには、本稿にとって見逃すことのできない簡が含まれているのである。馬圈灣出土簡の一部を次にあげよう。

S 1 推賢際長楊音詣官請八月奉 十月癸丑入東 ☒

79 D・M・T 6・45

S 2 大煎都候長王習私從者持牛車一兩 三月戊申出東門

79 D・M・T 6・47

S 3 ☐ 一月己酉出東門

79 D・M・T 6・50

S 4 大福候長張武推賢候史高護詣官 二月壬戌入東門

79 D・M・T 8・29

S 5 玉門千人行君客華君伯從者范大孫 二月辛亥入東入

79 D・M・T 9・30

S 6 ☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐ 二月丙午出東門

79 D・M・T 9・31

S 7 元康元年七月壬寅朔甲辰關帝夫廣德佐熹敢言之敦煌壽陵里趙負^(地?)

趨自言夫訴爲千秋際長往遺衣用以令出關敢言之

S 8 居攝三年吏私牛出入致籍

S 9 □轉穀輸塞外輸食者出關致籍

S 10 元始三年七月玉門大煎都萬世候長馬陽所竇操妻子從者奴婢出關 致籍

S 11 □門玉關候乙丞過謂士□

S 12 敦煌玉門關候孫閑公□治□□僉董錄強力事□□

S 13 出南校檄一玉門關候詣龍勒 居攝元年九月庚戌日□

時使官卒杜彭行付止姦卒王翁

(正) (背)

79 D・M・T 9・28
79 D・M・T 6・55
79 D・M・T 8・27
79 D・M・T 9・27
79 D・M・T 10・18
79 D・M・T 8・16
79 D・M・T 7・11

右の十三例の簡牘の中で、S 7、S 8、S 10に記された年月日は元康元年（前六五）から居攝三年（八）に及ぶ。一方、
スタイン遺址T 14出土より出土した簡の年代を紀年簡についてみた場合、太始元年（前九六）から始建國天鳳元年（二四）
の範囲にある。⁽⁴³⁾つまり馬圈灣遺址D 21は、玉門都尉府が置かれていたT 14と同時期に存在した機關であったこと、まず確
認しておこう。

さて、ここにあげた十三例においてS 11、S 12、S 13には「玉門關候」という名稱が見え、D 21遺址が玉門都尉府の管
轄區域にあり、しかもT 14とさほど離れていないことなどからすれば、この馬圈灣遺址D 21が玉門關と密接な關係をもつ
烽燧であることは瞭然であろう。そればかりではない。S 1～S 10の簡をみてみよう。まずS 1～S 6、これらの簡は前
章(一)で分析した「關出入記錄」と類を同じくする。肩水金關出土の關出入記錄には、出入者の年齢・身長が記入されてい
るのに對し、S 1～S 6にはその項目はない。しかし、人名・攜行品（人）をあげ、某月某日出（入）と記しているその
記載内容、人名と出入月日の間に一定の空白を保つというその書式からして、これらを關出入記錄のひとつに入れてよい
であろう。⁽⁴⁴⁾次にS 7をみれば文書内容からして、これは旅行者の身分證明書―傳に間違いない。そしてS 8、S 9、S 10、

それらは關出入記録を整理して作られる致籍の表題簡である。關出入記録、傳、致籍については全て前章で逐一検討したわけだが、そこで明らかになったのは、それらは關所と密接に關係した簡であり、少くとも一次記録である關出入記録が出土し、同時に傳、致籍の簡が出土するのは關所遺址に限るということであった。するとこのD 21馬圈灣遺址はどういうことになるのであろうか。出土木簡から見れば、D 21こそ玉門關そのものである可能性が極めて高いと言わざるを得ないのである。

ただ吳昶驥氏を中心とした馬圈灣發掘調査組の見解は、漢代玉門關址をこのD 21附近と推定するものの、D 21そのものが關所址だとはみていない。⁽⁴⁵⁾その理由としては、(一)D 21は一烽燧址にすぎず、附近の遺址が基本的によく残っているにもかかわらず、關門遺址が見あたらない。しかもD 21は東西に走る幹道から一五〇メートル北に位置し、本道上にないこと。(二)D 21出土の次の様な郵書傳達記録

S 14 東書二封 其一封大煎都候詣府
一封□□□□

正月己亥昏時受關佐楊籌 (正)

79 D・M・T 9・35

これは關佐楊籌が二通の東に向けての郵便を運んできたことを示しているが、ここにいる關佐とは玉門關の關佐であることは明らかで、ならば玉門關はD 21より西に位置する。以上の二點があげられているのである。しかし、この二つの理由は、甚だ説得力に缺けるとせねばならない。まず(二)について反論するならば、S 14に對して次のS 15の簡はどうであらうか。

S 15 出檄—五威左率詣玉門太守府

三月乙未日下舖時付關守裔夫張俊

79 D・M・T 5・255

玉門太守宛の檄を關守裔夫に渡した記録なのだが、S 14の傳達場所がD 21とすれば、同じ條件でS 15も同じくD 21と考えねばならない。⁽⁴⁶⁾とすれば關守裔夫はD 21にいることになりはしないのか。そもそも關裔夫にしろ關佐にしろそれら關所役人は關所に常駐するものなのか、實は私はこのこと自體に疑問を抱いている。先にあげたD 21出土簡S 7、これは敦煌縣壽陵里在住の趙負趨なる者が關裔夫に傳發行を申請している。かかる私用パスポートは在住の縣が一般に發行するとすれ

(47) ば、ここに見える關嗇夫——たとえ玉門關の嗇夫でないとしても——はどこに勤務しているのであろう。このほかT 14出土の簡のなかに次の様な郵書傳達記録がある。

S 16 入西蒲書二封 一封文德大尹章詣大使五威將軍府 始建國元年十月辛未日食時關嗇夫□受□□卒趙彭 疏三五七

この場合の蒲(簿)書を受理した關嗇夫は、玉門都尉府(T 14)にいたことになる。つまり關所の役人は關所に常駐しているとは限らず、他の部署に勤務もしくは出向している場合もあるということである。もっともS 14簡については、何もの以上のような方向から考えなくても、D 21に本來いた關佐楊籌が別の烽燧に所用で赴き、その折に郵書をもってD 21に歸つたとの想定、これも十分可能であらう。ともあれ、郵書傳達簡S 14にみえる關佐をもとにD 21が玉門關か否かを論ずるのは危険といわねばならない。

次にD 21の遺址殘存狀況と幹線路の關係をいう(一)の理由はどうか。吳氏はD 21は一烽燧址にすぎないとするが、正確に言えばD 21の現存部分ということであり、これでもってD 21全體を考えるのは早計であらう。今日關門遺址がないということと、當初から存在しなかったということは當然別問題である。D 21遺址が本來どの様な規模を有していたのか、このことは幹線路(それが二千年前の幹線路かどうかも定かでないが)との位置關係にも影響してこよう。かりに現存遺址以外にいくつかの建造物が比較的廣範圍に廣がつて附設されていたとすれば、わずか百メートル餘り南もその區域内に當然含まれてくる。馬圈灣遺址を玉門關址とみるかみないか、要するにそれは玉門關をどのような規模の關所として考えるのかにつながるのである。換言すれば、玉門關の機構といった問題に他ならない。節を改めて論じよう。

(二) 玉門都尉と玉門關都尉

漢代の關所にどういった官吏が勤務し、統屬關係がどうなっていたのか、實はよく分らない。『漢書』百官公卿表・都尉の條には、武帝の時に秦制を繼いで關都尉が置かれたことが記されているにすぎない。『漢書』のなかで具體的な關

都尉名が確認されるのは、函谷關都尉が擧げられるが、全ての關所に關都尉がいたわけではなく、少くとも肩水金關、居延縣索關には關都尉は置かれていなかった。⁽⁴⁸⁾ なればこそ、エチナ川の關は居延都尉、肩水都尉という部都尉の統轄下にあったともいえる。

さて、問題の玉門關について、まず第一にあげねばならない文獻史料は『漢書』地理志敦煌郡龍勒縣の一條である。

有陽關、玉門關。皆都尉治。

一方、スタイン・夏鼐などによって發見された敦煌漢簡には「玉門都尉」なる名稱が散見する。⁽⁴⁹⁾ 従って『漢書』地理志の玉門關の下都尉もこの「玉門都尉」ということになり、T 14（小方盤城）↓玉門都尉の治所↓玉門關の所在地、といった圖式がそこから導き出されたのである。しかし、果してそう考えるべきであろうか。

ここで整理しておかねばならないことは、邊郡の邊・候官を統轄する部都尉と關所の監督事務擔當の關都尉、この二つの都尉はあくまで別のものだということである。簡文中に散見する「玉門都尉」は、中部都尉・宜禾都尉と同じく敦煌郡下の部都尉の名稱であり、確かにその治所は小方盤城—T 14にあった。玉門關はこの玉門都尉府の領域内に置かれていたのだが、T 14出土の簡にはそこが關所であったという手がかりがないのみならず、同時期に存在したD 21馬圈灣出土の簡に關所關連文書が少なからず含まれていた。この事實を念頭に改めて『漢書』地理志の玉門關の簡所をみればどうなるのであろうか。地理志は敦煌郡下の二つの關、陽關・玉門關をあげ、そこが都尉の治所であるという。ならば玉門關に治所をおく都尉とは、關都尉と考えねばならなくなる。敦煌疏勒河流域には、部都尉としての玉門都尉と、關都尉としての玉門關都尉——その名を記した簡牘は發見されていないが——の二系統の都尉が置かれていたのである。

同様のことは「玉門候」と「玉門關候」についても言えよう。先にあげたD 21出土簡S 11、S 12、S 13には「玉門關候」なる官名が確認されるが、この名はスタイン發見のT 14出土簡にもみえる。

S 17 □□與訊守丞況玉門 關候蒲候丞與尹君所遣史宜執□籍□

S 18 □□書三封公玉門關候諭書言□壬辰日中時故持書三封□□村玉□□造□

□□□□□候出閉門敢言之

疏四〇九

一方、D 21、T 14 兩遺址からは「玉門候」という官名を記した簡も出土している。

S 19 六月甲戌玉門候丞可之記西塞候長可推將候候長□將□候長□□等記到□□

望府掾驚備□虜□□□□□□□令吏卒離署持七月候記將卒栗母忽□記令可課□

79 D・M・T 6・3

S 20 四月乙巳玉門候□移過所□

疏三八五

S 21 玉門候造史龍勒周生萌 伉健可爲官士吏

疏三六二

ここにいう玉門候とは、玉門都尉に直屬する玉門候官——その治所はT 15 aと推定される——の長を示していることは間違いない。對して玉門關候とはどういうものなのか。從來の説は玉門候と玉門關候は同じ官名、又は同一の官名が時期によって名稱が變わったと解釋されてきた。しかし玉門關都尉と玉門都尉が別のものとの推定が正しいとすれば、玉門候と玉門關候もやはり同じではなく、玉門都尉に直屬する玉門候官の長玉門候と、關都尉としての玉門關都尉の屬官である關候——玉門關候の二系統が存在したと考える方がより整合性をもつであらう。⁽⁵²⁾かくのごとく玉門關都尉と玉門都尉は別のものと考えられるのだが、實はこの二つの都尉は官秩に若干の差があると私は推測している。

内郡、邊郡を問わず一般に都尉の秩は、郡太守の二千石より一ランク低い比二千石であること、『漢書』百官公卿表、『續漢書』百官志などから確認できる。部都尉とは系列を異にし典屬國に屬する屬國都尉も同じく比二千石としてよからう。これに對して關都尉は文獻にはその秩高がはっきり記されていないが、いくつかの史料から類推すると、必ずしも部都尉・屬國都尉と同じ比二千石とは言えないのである。まず居延より出土の次の簡をあげよう。

E 43 □中二千石關都尉郡大□

五六・七 圖三六八

A 8 (破城子 Mudurbeljin)、甲渠候官址出土のこの簡は下達文書の斷片と思われ、「郡大」の下は「郡大(太)守」と續くの

であろう。いまこの斷簡で刮目したいのは、列擧された官名の順序である。こういう場合、秩の高い官から順に擧げていくことが一般であつたとすれば、⁽⁵³⁾この簡からは、關都尉が郡太守より秩が上、もしくは同等ということにならう。又、『漢書』金日磾傳には、哀帝期、日磾の子孫金參が匈奴中郎將↓越騎校尉↓關都尉↓安定・東海太守と歷任したとある。⁽⁵⁴⁾越騎校尉は八校尉の一つで二千石官、太守は言うまでもなく二千石、とすれば關都尉の秩も二千石とみるのが自然であろう。ただ關都尉がその設置の當初から二千石官であつたのかどうかは疑わしい。『漢書』元帝紀建昭三年の條に「三輔の都尉と大郡の都尉はすべて秩二千石とする」という詔令がみえ、この時に關都尉の秩も比二千石から二千石に上がったのかも知れない。

以上見てきたように、玉門都尉と玉門關都尉の二系統の都尉が存在し、しかも玉門關都尉の方が玉門都尉より秩が高い可能性すらあるとなればどうなるのであろうか。要するにそれは、玉門關から玉門都尉に送られる通關關係の上行文書は存在せず、玉門關は玉門都尉の所轄下には置かれていないことを物語る。いまいちどエチナ川流域の關所を想起したい。そこにおいては、都尉府毎に一つの關所が設けられ、各關所は出入に關連した記録を分析整理して上級官署である都尉府に送付していた。ところがここにそういった關所とは異なつた邊境の關が別に存在する。すなわち部都尉に屬さず、いわば獨立した關所であり、そこには關都尉が別に置かれている。關所關連文書は從つて部都尉には送られず、關所——そこは關都尉の治所でもある——で處理されることになる。私は邊境の關所には、部都尉屬下のものと關都尉直屬の二種があり、玉門關はその後者であつたと考えたいのである。

玉門關が肩水金關などとは異質であつたと言っても、國內の吏民の移動を逐一管理・記録するといった内政的性格を玉門關も有していることを否定するつもりはない。D 21馬圈灣出土簡とA 32肩水金關址出土簡が示す類似性は、二つの關所の性格の共通性を端的に物語るといってよい。ただ玉門關に限って言えば、袋小路ともいえるエチナ川流域とはちがひ、西方に通ずる幹線路にかかわっていたからであらうか、軍事的・對外的役割が金關・縣索關より重かつたことは容易に想

像がつく。いわば内政的性格と外交的性格を同時に有するといつてよく、そのことが他の邊關とはちがった關都尉直屬の關という格の違いとなつて表れたのである。

話をいまいちど馬圈灣遺址にもどそう。先に私は馬圈灣遺址を玉門關址とみるかみないかは、玉門關をどの様な規模の關としてとらえるのかによると言つた。それはつまり玉門關に對して抱くイメージの差ということなのだが、そこに關都尉の治所が置かれ、關都尉・關侯をはじめとする關吏が駐在しており、部都尉の官署に匹敵する、もしくはそれ以上の規模をもつ機關とするならば、官署の建物は廣域にわたつていたにちがひなく、孔道から百數十メートルは、問題にならない。現存のD 21遺址は、玉門關都尉の官署の一部であり、同時にそこには玉門關が置かれていた、私はこのように考えた。い。

章を終えるに先だち、關都尉について次のことを追述しておこう。前漢期に秦制を繼いで設置された關都尉は、後漢建武九年(三三)廢止される⁽⁵⁵⁾。それに先だつ建武六年(三〇)、邊郡の都尉と屬國都尉以外の都尉を廢止して⁽⁵⁶⁾、關都尉廢止もその延長線上にあつた。しかし十年後の建武十九年(四三)には函谷關都尉が復活して置かれ⁽⁵⁷⁾、さらに中平元年(一八四)黃巾の亂の影響で函谷・廣城・伊闕・大谷・轅轅・旋門・小平津・孟津の八關に關都尉が置かれることになつた⁽⁵⁸⁾。こういった流れの中で玉門關都尉はどうなつたのか。考えられることは、一連の都尉廢止において邊境の都尉は除外されていたわけで、玉門關都尉も同じく存続していたとみることもできる⁽⁵⁹⁾。しかし中平元年(一八四)の八關都尉の設置をいう『後漢書』皇甫嵩傳には、「自函谷・大谷・廣城・伊闕・轅轅・旋門・孟津・小平津諸關、並置都尉」としてそこには、一四〇年前にすでに復活していた函谷關都尉もはいつていることよりすれば、文意はこの段階で關都尉がそろつて八關都尉となつたというこゝとであり、玉門關都尉はやはり建武九年の段階で廢止されていたと考える方が自然であらう。關都尉が廢止されたのちの玉門關はどうなつたのか。ここから先は據るべき資料は全くない。素直に考えれば玉門都尉の統轄下に入つたということになるが、想像の域を出ない。ただそこで吳祐驥氏のように玉門關そのものが東に移つたというの

は、いささか速断にすぎよう。報告書には馬圈灣出土簡の下限は地皇二年（二一）であり、王莽期以降、そこが破棄されたことを物語るといふ。この説も亂暴であるが、かりに馬圈灣遺址に王莽期以降の何らかの變化が認められるとすれば、それは關都尉廢止にともなう變化であり、關所の破棄、移動を直接示すものではないと考えたい。

結びにかえて

——羌笛何んぞ須^もいん楊柳を怨むを 春光^{わた}度らず玉門關

——青海の長雲 雪山暗し 孤城遙かに望む玉門關

——秋風吹いて盡さず 總て是れ玉關の情

邊塞の兵士の辛苦と悲哀、彼らを都でまつ家族の慕情を詠う唐詩の玉門關、それはシルクロードの門戸、國境の關であり、そこより西はもはや漢文化の及ばぬ異國、まさに「陽關を出ずれば故人なからん」世界としてとらえられている。そして今日我々が玉門關に對して抱くイメージも、おそらく「陽關を出ずれば」といったものにちがいない。こういったイメージがいつごろ定着し、詩語となつて詠われるに至つたのか私には詳らかにし得ないが、歴史的解釋、少くとも漢代の歴史のうゑに玉門關を置いて見た場合、唐詩のそれとはいささかちがう玉門關の姿がうかんでくる。圖Ⅱを一見すれば瞭然である。玉門關より西にも漢が置いた烽燧が點在しており、軍事行政區域で言えば、玉門關以西は敦煌郡玉門都尉大前都候官の管區であつて、決して玉門關は國境の關所ではない。⁽⁶⁰⁾邊境の關所は吏民の移動を監視するチェックポイントであり、國境に置かれたわけではないこと、本稿で折にふれ指摘したところでもあつた。さらに言えば、玉門關より一步西にふみ出せばそこは異國というこの文學的イメージが、歴史のうゑで玉門關を検討せんとする我々にとって、邪魔になることもある。その端的な例が、シャバンヌが主唱し、王國維も賛同した有名な玉門關移動説であり、又それに對して出された向達氏らの反論でもあつた。⁽⁶¹⁾

太初三年（前102）、汗血馬を獲得せんとして大宛に遠征していた李廣利が、食糧と兵力の不足から成果を得ずして歸還する。敦煌までもどってきた李廣利は、そこから武帝に書簡をおくるのだが激怒した武帝は、玉門關を閉し一步でも關に入れば斬りすてよと命ず。李廣利はしかたなく敦煌に留まった。

——還りて敦煌に至る。士は什に一二を過ぎず。使をして上書して言う。（中略）天子是れを聞き大いに怒り、使をして玉門を遮とどして曰く。軍の敢えて入る者有らば、輒ち之れを斬れと。貳師は恐れて因りて敦煌に留まる。

『史記』大宛列傳のこの記事よりすれば、太初三年には、玉門關は敦煌——それが縣であるか郡であるかは、ひとまず措くとして——の東にあったことになり、數年ののちT14（小方盤城）に移動したにちがいないとシャバンヌは考えたのである。シャバンヌの説は、王國維も支持するのだが、これに對し向達・夏鼐さらには我が日比野丈夫の諸氏は反論を出し、玉門關はその設置の初めからT14にあったと主張する。その反論にはいくつかの論點があるのだが、シャバンヌ説に對する基本的疑念は、玉門關が敦煌の東にあれば關門としての意味をなさないということにあったと言えよう。

この問題に關して、最近、馬雍氏が興味深い説を提唱した。⁽⁶²⁾氏はまず、李廣利が「敦煌に留まった」ということは、つまり敦煌郡内に留まったという意味に解し（馬氏は敦煌郡は太初元年に成立していたとみる）、そのうえで玉門關は敦煌の西界にあったのではなく、玉門關外もなお敦煌郡境に屬す、玉門關を閉ざされた李廣利はやむなく關以西の敦煌郡境内に駐屯したのであり、ここに文獻上の矛盾はないと解釋するのである。

玉門關をはじめとする當時の邊境の關が境界に置かれたものではないこと、本稿ではくり返し述べてきた。その意味でこれまでの玉門關のイメージを脱却したこの馬雍氏の論考は、誠に示唆に富むものとせねばならないのである。もともと馬氏の立説の柱ともなる敦煌郡の成立年代については、なお検討の餘地があるかも知れないが、私にはそのことを論評する有力な決め手を持たない。ただ別の觀點からこの李廣利の記事について言及しておきたいことがひとつある。

大宛より功なくして歸ってきた李廣利に怒った武帝は、玉門關を遮とどさし關内に入れなかった。ここで考えてみたいの

は、門を閉ざされたことで李廣利の軍は、實際に東に進むことが不可能となったのであろうか。少くともシャバンヌ氏は、閉門によって物理的に東進が阻止されるとの前提に立ち、敦煌と玉門關の位置を決めているのである。しかし砂漠地帯という地理條件を考えても、玉門關の開閉が進行の阻止にいかほどの意味があるのであろう。「玉門關を遮す」ということは實際にどのような効果があつたのであろうか。そこで思い出したいのが、本稿で論じてきた關所の役割・機能である。邊境の關は吏民の通行をチェックしそれを記録するのがその第一の職務であつた。見方を變えれば、關所を通過する者は、必ず關所で通過手續をし、關所の記録に登録してもらわねばならず、それが玉門關という關ならば、いわば入國、出國手續にも相當する重要なものであろう。武帝が玉門關を遮したということ、それは李廣利の入國手續の拒否を意味し、玉門關の出入記録に記入されない限り、李廣利とその配下の者はいくら内地にいても歸國したことになるのである。歸國手續を拒絶された李廣利は、しかたなく手續をしないまま敦煌にとどまっていた。私は『史記』大宛列傳の件の一節をこう解釋したい。

以上、本稿では居延漢簡、敦煌漢簡の兩者を利用して邊境の關所につき考察をすすめてきた。そこにおいて、例えばエチナ川流域の關所の數と名稱の推定、玉門關址の言及など現段階では、いささか冒險にすぎるところまで踏み込んでしまった。近い將來、居延、敦煌簡に關するさらに詳しい發掘報告がなされるであらう。とりわけ一九七三・七四年出土の居延簡のうち破城子出土のものが間もなく出版されると聞く。本稿で述べたことも、全面改正をせねばならないかも知れない。

註

(1) 藤枝晃「長城のまもり」(『自然と文化』別編Ⅱ 一九五

五)、同「釋『見署用穀』ほか——『長城のまもり』訂誤」

(『東洋史研究』一四——二 一九五五)。

(2) 「敦煌馬圈灣漢代烽燧遺址發掘簡報」、吳昶驥「玉門關與

玉門關候」(ともに『文物』一九八一——二〇)。

(3) 「敦煌酥油土漢代烽燧遺址出土的木簡」(『漢簡研究文集』

甘肅人民出版社 一九八四。

- (4) 最近出版された邵臺新『漢代河西四郡の拓展』（臺灣商務印書館 一九八八）は、河西地方の行政軍事組織を詳しく論じており、そこですでに酥油土出土簡も引用して、中部都尉所屬の候官についての修正が行なわれている（一一八頁）。

- (5) 林梅村・李均明編『疏勒河流域出土漢簡』（文物出版社 一九八四）。

- (6) 候燧の所屬を決めるにあたっては、かつて永田英正氏が居延一帯の候燧組織を検討するのに採用された方法をここでも援用した（永田「居延漢簡烽燧考」（『東方學報』京都三六一九六四）。同「簡牘よりみたる漢代邊郡の統治制度」（『講座敦煌』第三卷 一九八〇）。すなわち①文書の中で候燧名の上に候官名を明記したもの、候官名と同じ名稱をもつ候燧のグループ。②①の候燧と何らかの形でセットとなるもの。③候官の遺址から出土した簡牘中に名がみえ、しかもその候官に送られた文書中に名が見える候燧。以上の点から候燧の所屬を推定していく方法である。なお、③に關して言えば、玉門都尉府屬下の二候官のうち、大煎都候官はスタイン編號 T 6 b 遺址、玉門候官は同 T 15 a 遺址に置かれており、又中部都尉下の平望候官は、本文にも言及したが D 38、吞胡候官はスタイン編號 T 23 I 遺址に置かれていたと私は考えている。ただし、敦煌簡の場合は、居延漢簡と比べて數量が少なく、居延地帯ほどは詳しくは分らない。加えてここにあげた候燧が存在した時代は前漢後半期から後漢にかけてであるが、その間の候燧の興廢は考慮に入れていない。

- (7) 拙稿「玉門都尉と玉門候官——スタイン遺址 T 14・T 15 a 出土木簡の分析——」（『中國邊境社會の歴史的研究』昭和六三年度總合研究(A)研究成果報告書）一九八九。

- (8) 大庭脩「漢代の關所とパスポート」（『秦漢法制史の研究』創文社 一九八二）。

- (9) 「居延漢簡甲乙編」（中華書局 一九八一）下冊「附錄」、大庭脩「居延漢簡甲乙編」の出版と居延漢簡研究」（『關西大學文學論集』三三——一九八二）、參照。

- (10) 以下とりあげる簡牘資料についてエチナ川流域出土の簡（いわゆる居延漢簡）は E 1、E 2……としてあげる。資料末尾の番號は、原簡番號と勞幹「居延漢簡圖版之部」（中央研究院語言研究所專刊之二十一 一九五七）の頁數。また疏勒河流域出土簡（いわゆる敦煌簡）は S 1、S 2……としてあげる。末尾の番號は、「疏〇〇」とあるのが『疏勒河流域出土漢簡』（前掲）に附された番號、馬圈灣・酥油土出土簡については、註(2)(3)にあげた出土報告書が附けた簡番號である。

- (11) 他に「□□□ 不出」（三三四・一六）、「□黑色 不出」（三三四・三三）、「驪軒萬歲里公乘兒倉年卅長七尺二寸黑色劍一 已入 牛車一兩□」（三三四・三三）などもあるが、これらには月日が記入されておらず、關出入籍というより備品支給簿の類である可能性が強い。

- (12) 同じく往來・通行に關する記録として、候官に出頭した着到簿があり、たとえば「警虜燧長詔召詣官八月戊戌平旦入」（二〇三・一一）などの内容をもち、破城子（甲渠候官址）

からかなりの数出土している。永田英正氏はこれらの簡を「詣官簿」と名づけ、考察している（「居延漢簡にみる候官についての一試論」、『史林』五六―五。本稿でとりあげた關出入記録と一見、内容・書式が似ているが、私は兩者は性格の違うものだと考える。「詣官簿」には名前と日附の間に一定の間隔は空けられていない。このことは、「詣官簿」が關出入記録のような一次記録とは異り、候官にて官吏の勤務評定を前提に整理された記録であることを示すであろう。

別にA 33（肩水候官址）から關出入に關すると思われる簡が二十點ばかり出土している。永田氏はこれらを關出入記録とされるが（「居延漢簡の集成」三、『東方學報』五一）斷簡が多く、比較的完全なものである二八〇・三簡「書佐忠時廿六長七尺三寸黑色 牛一車集 第三百九十八出」には符の番號が記されており（一一・四簡も同様）、それらは後述の符を攜帶して候官に出入した者の記録とも考えられ、金關などで作られる一般の出入記録とは區別したい。

(13) 大庭脩「漢代の關所とパスポート」（前掲）。

(14) 大庭脩『木簡學入門』（講談社 一九八四）二六四―二六五頁。

(15) 『漢代の文物』（京都大學人文科學研究所 一九七六）「書契」五二九頁。

(16) 大庭脩「漢代の關所とパスポート」（前掲）六二〇―六二二頁。『漢代の文物』（前掲）五三四頁。

(17) 「敦煌酥油土漢代烽燧遺址出土的木簡」（前掲）。

(18) 最近、大庭脩氏は臺北中央研究院歷史語言研究所にて一九

三〇・三一年出土の居延舊簡を調査し、その成果が「漢簡研究ノート」（『史泉』六八 一九八八）として發表されている。ここでは「符について」という章が設けられており、氏はこう記す。「但し六五・七、六五・九、六五・一〇の刻齒の内側に文字の痕跡を認めることはなかった」と。本稿にとって、これは誠に都合の悪いことである。氏に書簡でお聞きしたところ次の返事をいただいた。「金關出土の符は大部分文字の墨色がとんでいるのははっきりした結論は出さぬ方が良いかも知れません。」

(19) 符文の意味が「居延縣と金關の間で……」と解されたその理由の一端は、符文が「居延與金關……」と「居延」の語が先に位置していることもあるかも知れない。ただこれは何故だかわからないが、當時の方向感覚、特に往復を前提とする場合、例えばA點からB點まで行ってA點にもどる場合、B↓Aという方向でとらえる。「三人負麻人反十八束反復卅里人再反六十里」（疏一一二）、「三人負粟步昌人二反致六燹反復百八十八里百廿步率人行六十二里二百卅步」（疏一五五）。符文の「居延」と「金關」の順序もこの方向感覚によるのかも知れない。

(20) 大庭脩「漢代の關所とパスポート」（前掲）。

(21) 「元鳳二年二月癸卯居延與金關出入六寸符券齒百／從第一至千左居官右移金關符合以從事 第九百五十九」（『文物』七八―一「居延新出土的漢簡」圖版四―二）。

(22) 大庭前掲論文六〇七―六一八頁參照。

(23) たとえば『漢書』王莽傳に「吏民出入。持布錢以副符傳。」

同王莽傳「大司空王夜過奉常亭。亭長苛之。告以官名。亭長醉曰。寧有符傳邪。」「後漢書」南蠻西南夷傳「無關梁符傳。租稅之風」などと「符傳」なる語が見えるが、これが「符と傳」なのか「符傳」で一語なのかわからない。

- (24) 陳邦懷「居延漢簡考略」(『中華文史論叢』一九八〇—二)。裘錫圭「漢簡零拾」(『文史』十二、一九八一)、薛英群「漢代符信考述」(『西北史地』三、四、一九八三)。

- (25) E 33 についてさらに言えば、「八月戊戌入」と「甲辰出」の墨色の濃淡にやはり差が認められるのである。

- (26) 永田英正「居延漢簡の集成一」(『東方學報』京都四六、一九七四)、同「簡牘よりみたる漢代邊郡の統治制度」(『講座敦煌』第三卷、一九八〇)。

- (27) 本稿で考察した「關出入記錄」については、すでに李均明「漢簡所見出入符傳與出入名籍」(『文史』一九、一九八三)にてとり擧げている。そこで李氏も A 21 が關所である可能性をいう。

- (28) E 33 にみえる「迎司御錢居延」につき、嚴密に言えば、居延に受けとりに行ったのか、居延より送られてくるのを受けとりに行ったのか判断がつかない。後者だと目的地は居延とは限らないことになるが、ただ向かう方向としては、やはり北行と見るのが自然であろう。

- (29) 伊藤道治「漢代居延戰線の展開」(『東洋史研究』十二—三、一九五三)。大庭脩前掲論文。

- (30) 同じ勞幹『居延漢簡考釋 釋文之部』(石印本)は「辟北始廣關」、同『居延漢簡 考釋之部』は「辟北始受關」、『居

延漢簡甲乙編』は「殄北如度、以」とそれぞれ釋讀する。

- (31) 「收關」と釋するのは、勞幹『居延漢簡考釋 釋文之部』であり、同『居延漢簡 考釋之部』では「收降」となっている。

- (32) 「閏月庚子肩水關番夫成以私印行候事」一〇・六。

- (33) 實は、この橐佗候官と廣地候官の位置が逆ではないかとの考え方もあるかも知れないが、今はとりあえず藤枝・永田氏らの説(ともに前掲論文)に従っておく。

- (34) 「敦煌效穀宜王里瓊陽年廿八 軺車一乘馬一匹 閏月丙午南入」五〇五・一二。同様のものとして(五〇五・一三)(五〇五・九)(五〇二・六)(五〇六・三)などがある。別に書式の異なる五〇二・二簡も A 35 より出土している。

長安假陽里閭丹年十一 閭放復致北出 孫昌復致北出 三月己巳南番夫入守
 〓亭長出 五月壬申北守亭長當出 五〇二・二

なお、關の出入記錄が都尉府に送られたことは既に大庭脩氏も指摘している(大庭前掲論文、六〇四頁)。ただそこで氏は、「甘露元年十一月壬辰朔甲午肩水關番夫光以小官印兼行候事敢言之」/出入簿一編敢言之」一九九・一 A なる簡にみえる「出入簿」がそれにあたるとするが、そのことには同意できない。漢簡にいう「簿」とは物品に關するものでたとえば、「陽朔元年十一月甲辰朔戊午第廿三候長赦之敢言之謹移錢出入簿一編敢言之」二八・四、「甲渠候官甘露五月二月穀出入簿」八二・六、などが同類と考えられる。對して人間についての記錄は「籍」で、「出入簿」と「出入籍」は異なると考える。

- (35) 永田英正「居延漢簡の集成」(前掲)一七三頁。
- (36) 南書一封居延都尉章 詣張掖大守府
九月辛巳日入誠敦北隴卒
〇月〇日甲渠木臨隴卒有人自
月卅卅并南界隴卒付實地
北界隴卒明北界
誠敦北隴州八里定行三時
五分〇三十三〇〇〇
一六三・一九
- (37) E. Chavannes: *Les Documents Chinois Découverts par Aurel Stein dans les Sables du Turkestan Oriental*, OXFORD 1913. 王國維「流沙墜簡」。勞幹「兩關遺址考」(『歷史語言研究所集刊』十一 一九四七再版、向達「兩關雜考」(『唐代長安與西域文明』生活・讀書・新知三聯書店一九五七)、夏鼐「新獲之敦煌漢簡」(『歷史語言研究所集刊』十九 一九四八)、日比野丈夫「河西四郡の成立について」(『中國歷史地理研究』同朋舎 一九七七)。
(38) 拙稿「玉門都尉と玉門候官」(前掲) 參照。
(39) 「沙州圖經」については、池田溫「沙州圖經略考」(『檀傳士還曆記念東洋史論叢』山川出版社 一九七五)、壽昌縣地鏡については向達「記敦煌石室出晉天福十年寫本壽昌縣地境」(『唐代長安與西域文明』前掲)、森鹿三「新出敦煌石室遺書特に壽昌縣地鏡について」(『東洋學研究 歷史地理篇』東洋史研究會 一九七〇)に詳しい。
- (40) 前掲拙稿、參照。
- (41) 陳夢家「玉門關與玉門縣」(『漢簡綴述』中華書局 一九八〇)。原載は『考古』六五一九。
- (42) 馬圈灣遺址發掘報告及び出土簡については、註(2)參照。
- (43) 『疏勒河流域出土漢簡』(前掲)「前言」參照。
- (44) これらを註(12)で紹介した「諸官簿」とする見解があるかも知れないが、S2、S3、S6には「出」が記録されており、その点からみて「諸官簿」と看做すことはできない。
- (45) 吳昉「玉門關與玉門關候」(前掲)、同「漢代玉門關及其入西域路線之變遷」(『中亞學刊』二 一九八七)。
- (46) いったいこれら郵書傳達記録というのは、燧單位まで下る傳達地點でそれぞれ記録が作られるものなのか、それとも候官などの上部官署でまとめて作成されるのか、私にははっきりわからない。郵書傳達記録が果して燧に於いても作られるのか改めて考えねばならない問題であろう。
- (47) 大庭脩「漢代の關所とパスポート」(前掲)六〇七—六一五頁、參照。
- (48) 同右、六〇一—六〇六頁、參照。
- (49) 簡番號のみあげると、疏20、203、352、386、435、524などである。
- (50) 王國維「流沙墜簡」(『烽燧類』)參照。
- (51) 吳昉「玉門關與玉門關候」(前掲)十二頁。
- (52) 他に「玉門障尉」なる官名が記された簡も存する。「建武十九年四月一日甲寅玉門障尉戎告候長晏到任」(疏四六七)。この「障」とは、候官の別稱であり玉門候官直屬の尉である。詳しくは、藤枝晃「漢簡職官表」(『東方學報』京都二五 一九五四)六四—一頁、參照。
- (53) 一例を挙げれば、「二月丁卯丞相相下車騎將、軍中二千石、郡太守諸侯相承書從事下當用者如詔書」(少史慶令史宣

王始長」一〇・三〇。

- (54) 『漢書』金日磾傳「哀帝即位。爲奉車都尉。至長信少府。而參使匈奴。匈奴中郎將。越騎校尉。關都尉。安定・東海太守。」

右の「關都尉」を景祐本、慶元本ともに「關內都尉」に作るも、宋祁説により「關都尉」とする。また、越騎校尉をはじめとする八校尉については、その秩が比二千石との説もあるが（大庭脩「漢の中郎將・校尉と魏の率善中郎將・率善校尉」『秦漢法制史の研究』）、福井重雅「賢良・方正の成立」『漢代官吏登用制度の研究』）、それらが二千石とする『漢書』百官公卿表を誤記と片づけてしまふのにも抵抗がある。

- (55) 『後漢書』光武帝紀下「是歲（建武九年）。省關都尉」

- (56) 『續漢書』百官志「中興建武六年。省諸郡都尉、并職太守。無都試之後。省關都尉。唯邊郡往往置都尉及屬國都尉。」

- (57) 『後漢書』光武帝紀下「是歲（建武十九年）復置函谷關都尉。修西京宮室。」

- (58) 『後漢書』靈帝紀「（中平元年）三月戊申。以河南尹何進爲大將軍。將兵屯都亭。置八關都尉官。」『後漢書』皇甫嵩傳「詔敕州郡修理攻守。簡練器械。自函谷・大谷・廣城・伊闕・轅轅・旋門・孟津・小平津諸關。並置都尉。」

- (59) 『後漢書』西域傳には、順帝永建四年（一二九）のことと

して次の記事がみえる。「北匈奴呼衍王率兵侵後部。帝以車師六國接近北虜。爲西域蔽扞。乃令敦煌太守發諸國兵。及玉門、關侯、伊吾司馬、合六千三百騎救之。」つまり玉門關侯は廢止されず存続していたことになる。

- (60) 『後漢書』西羌傳にも長城を越えて烽燧が續いていたことをいう。「初開河西。列置四郡。通道玉門。隔絕羌胡。使南北不得交關。於是障塞亭燧出長城外數千里。」

- (61) 註(37)の諸論文参照。なおこの経緯については日比野丈夫「河西四郡の成立について」（前掲）に詳しい。

- (62) 馬雍「西漢時期的玉門關和敦煌郡的西境」（『中國史研究』一九八一—）。

〔補記〕最近、拙稿に關係する論考および論著が出された。大庭脩「漢代的符和致」（『中國史研究』一九八九—三）、永田英正「居延漢簡の研究」（一九八九 同朋舎）である。前者は、本稿でとりあげた關所通過に關連する文書をとりあげ、その性格・意味を論じており、後者は永田氏の舊稿を改定した新たな見解に基く總合研究である。當然、これらを參考にせねばならないのであるが、残念なことに本稿寄稿後に出版されたもので、それができなかった。

CHECKPOINTS AT THE BORDER AREAS DURING THE HAN PERIOD

TOMIYA Itaru

This paper is composed of two parts. In the first part, by means of analysing the Han period wooden strips (Juyan Hanjian 居延漢簡) unearthed in the Edsen-gol valley, I intend to inquire into the actual circumstances and functions of the Han period checkpoints in the Zhangye 張掖 prefecture. In the second part, based on the results obtained in the first part, attention is turned to the checkpoints located in the Dunhuang 敦煌 prefecture. More specifically, the location and role of the Yumen checkpoint 玉門關 is dealt with. The wooden strips unearthed at the Majuanwan 馬圈灣 ruins in 1979, provide the raw data necessary to ascertain the location and role of the Yumen checkpoint. Finally, the doubtful points regarding the up till now thought to be correct position and function of the Yumen checkpoint are presented and a new point of view is developed.

BAOLAN 包攬 BY THE SHENCHIN 紳衿, AND THE QING GOVERNMENT

YAMAMOTO Eishi

In the early eighteenth century when the Qing government was trying to establish the principle that the landholder should pay tax directly, the practice of Baolan (tax farming) by the Shenchin (gentry) led to the large-scale avoidance of tax. This system of tax avoidance spread throughout the land, both to the north and the south. The political influence of the Shenchin in the local government made this possible. In order to evade unofficial exploitation by the local government, the ordinary landholder inevitably came to be absorbed into the Baolan